

教育を問う

大 塚 稔

Reaching the Ideal

Minoru OTSUKA

I：綜藝種智院の校則

日本には、九世紀にあって、教育を総合的な見地から捉えた天才的な人物がいる。弘法大師空海である。彼は、二十四才にして『三教指帰』を認めて、その稀有の才能を示した。世俗の名利を説く亀毛先生の儒教と、脱俗を理想とする虚亡隠士の道教を排して、仮名乞児が説く仏教をもっとも優れた思想として支持した。（筆者注：当時、彼が理想とした仏教は、忘己利他に徹する衆生済度の大乗の仏教であって、小乗的な自己の悟りに主眼を置く仏陀の思想とは趣を異にしている。）儒、仏、道に長けた空海は、後年、天長五年、八二八年、仏教を抛りどころに、それら三学を平等に学ぶ庶民の学校を設立することになる。

空海は、この学校を作るにあたっては、人々を救うこと、つまり衆生済度と、儒仏道の三教を、兼ねて学べる学校を作ることを念願とした。幸いに、藤原三守の寄進によって、理想の環境下に希望の学校ができた空海は、その学校を、当初の意図通り、あらゆる学問を総合的に統合することが智慧の種となるという意味で「綜藝種智」院と名づけた。（筆者注：この言葉の由来は、大日経の「初めには阿闍梨、衆芸を兼ね綜（す）ぶ」および大般若経の「一切種智を以て一切法を知る」による。）そして校則を作った。それが『綜藝種智院の校則序を并せる』である。

そこでは、教育に必要な校則として、次の四つのことが課せられた。一つは、教育環境がよくなければならないこと。（筆者注：周囲の自然環境が教育の場に相応しいこと）。二つ目は、あらゆる学問を総合的に教育し、人間教育を眼目とすること。三つ目は多くの優れた先生を得る必要があること。四つ目が、教師と学生がともに学問に専念できるように、生活を保障すること、である。

まず学問を総合的に教育するという点から、彼の主張を見ることにしよう。

「中国のあらゆる学藝は、世の人々のためになること、たとえば人々を向こう岸へわたす舟や橋と同じようなものであります。（中略）まさに目ざめたものも永劫にわたって、あらゆる学藝を兼学して偉大な悟りを完成していますし、菩薩をころごすものたちが、完全な智慧を実現することができるのも、あらゆる学藝を学び、身につけてこそであります。どんな食物でも味が一つだけでは、おいしくありません。またどんな音楽でも、たった一音だけでは優れた音色を出すことはできません。個人的に一個人の人格を完成するにしても、公的な国家を治める場合の方策にしても、あるいは宗教の理想に到達するにしても、この学芸の真理をすてて、どうしてえられましょう。」（『空海』宮坂宥勝ちくま学芸文庫190頁）

とある。あらゆる学問の修得が、単に個人の人格を完成するだけでなく、国家を治める場合にも、宗教の理想に到達するためにも、有用なことだとした。教育が、人間教育を根本に据えて極めて包括的に捉えられている。育青年時代に儒仏道の三学を等しく学んだ空海の、その後の修行の重みを髣髴とさせる至言である。そして、

「どうか、仏教・道教・儒教の道を明らかにあらわして、混迷の夜にも等しいこの世を照らし出し、それぞれの人にあてがって説かれた仏教のいろいろな教えをあげてみな教授し、すべての人が悟りの世界に到達できるように願うしだいであります。」{同書 191 頁}

と、祈願した。混迷の世を照らす光を、儒仏道の修得に求めつつ、人々を救うためには、仏教的な悟りに導くことが何より肝要なことであった。しかしこのような学校は理想でしかなく、実現は困難だと批判された。その非難に応えて、空海は、

「すべてのことが盛んになるか、おとろえるかは、その人を得るかどうにかかっています。(中略) またたとえば大海は多くの河川が流れ集まってこそ、深みを増し、スメール山はわずかな積み重なりをかさねてこそ悠然とそびえ立つことができます。大きな建物になればなるほど、無数の材木が支えあってはじめて建つのであり、一国の首位者が存立するのも同じこと、多くの支持者を必要といたします。{中略} 諸宗の高僧名徳がみな、わたくしと志を同じくしてくださるならば、この学校は、いつまでも続いてゆくことでありましょう。」(同書 192 頁)

と述べ、良い人材を得れば、そしてそのような人材が一同に結集すれば、必ず実現すると謳っている。(筆者注：空海の死去に伴い、845年には、残念ながら売却されてしまった。空海の願いもむなしく、この学校はおよそ10年程しか存続しなかったことになる。再興されたのは、明治14年である。)

そしてまた、すでに官学が存在するのに、あえて小規模な私学を造ってみても、大した意味はないという非難に対しては、唐の長安では都に学道を教育する場があり、広く児童たちを教えていること。更には才能ある立派な人材が都に溢れているという事実を指摘した上で、わが国の現状を以下のように述べている。

「わが国の平安京には貧しい児童が勉強しようとしても、どこをたずねたらよいのかわかりません。また好学の人でも、都を遠く離れた土地にいますと、都の学校に往復するのは、なかなか骨の折れることであります。わたくしはいまこの綜藝種智院を建てて、あまねく児童たちを助けてやりたいと思う次第です。(中略) 仏教の理想とするところの人間完成のためのよきつちかにしたいと思います。」(同書 193～4 頁)

と結んだ。学ぶ意欲を持った児童や好学の士に、人格を完成させる便利で有益な場所を提供したと言うのである。しかし、たとえ教育環境や学習内容がどれほど素晴らしくとも、教師の質がわるければ、何の教育効果もないとした。だからこそ綜藝種智院では、仏教の典籍とその他の学問とをそれぞれ分けて教授できるように、教師にも、この二つの分野にそれぞれ秀でた者が雇われた。一つは、

仏者としての教師、もう一つは、世間一般の教師である。仏者としての教師は、仏典を伝え教える仕事を、世間の教師には、仏教以外の学問書物を教える仕事が課せられた。この二つの教師には、以下の事柄が具体的に求められた。まず仏者としての教師には、

「仏者たるものは、一般仏教と真言密教とを兼ね学ぶように心がけねばなりません。〔中略〕仏教の典籍を学びたい者があれば、四量（筆者注：慈・悲・喜・捨）と四摂（筆者注：布施・愛語・利行・同事）ということによく思いをひそめて、倦まずたゆまず教え導いてゆかねばなりません。そして仏教を学ぶ者の身分階級のいかんによって、教育に手心を加えるようなことが決してあってはいけません。よろしきにしがって指示し教授するのが良いのです。」（同書 196 頁）

と定めている。そして世間の教師には、

「若い学童にして文書を学ぼうと志す者があれば、教師たるものは、慈悲の心を持ち、忠孝に思いをいたして、学童の貴賤を問わず、貧富をみず、よろしきに從って導き（筆者注：その能力に応じて指導し）、うまずたゆまず人々をおしえなければなりません。およそこの世にありとあらゆる人々は、ことごとくわが子であると思わなくてはならないというのが、仏陀のおことばであります。またこの世界に住む者は誰しもがお互いに兄弟であるといったのは、孔子であります。ですから、ましてや教育者たるものは、世の人の子を預かって教育し、その人の人生の人格形成に参与する重大な責任を負わされているのですから、子弟を教育教化するにあたって、親子兄弟の血のつながりの自覚を深め、大きく豊かなる慈愛を持ってつつんでやらなければなりません。」〔『空海』ちくま文庫、197 頁 宮坂有勝著〕

慈悲の心を持ち、忠孝に思いをいたし、よろしきにしがってうまずたゆまず教えること。そして教師には何より、学ぶ者の人格形成に参与する重大な責任があると指摘する。これは、世間一般の教師に、仏陀の慈悲と、孔孟の仁義と、老荘の融通無碍を体得することを求めるものであって、儒仏道を総合的に学習させるシステムを自らの学校で実現しようとした空海に相応しい教師像である。どれほどの教師が、慈悲の心を持ち、忠孝に思いをいたし、よろしきにしがってうまずたゆまずに教えているだろうかと問われれば、慙愧の念に堪えない。

教育は、何よりも総合的でなければならない。そして人間教育を眼目としなければならない。それには、環境が良いことは言うまでもないが、当然のことながら、教師も良くなければならない。そして何よりひたすら学問に専念できるためには、生活が保障されていなければならない。まさに卓見である。素晴らしい環境のもと、生活費を支給されながら、あらゆる学問を優れた教師から学べることほど、幸せなことはない。

Ⅱ：孔子・朱子・老子・仏陀

まず、空海が理想とした教育者の一人である孔子の教育論は、どのようなものであったのかを見ることにしよう。『論語』には、人口に膾炙された名文が多い。日本人の多くは、「十有五にして学

に志し」とか「四十にして惑わず」というような一節がすぐ念頭に浮かぶだろう。しかし論語にはどのような教育論が展開されているかと聞かれると、知る者はそう多くはない。例えば、陽貨には、

「性は相近し。習えば相遠ざかる」

という言葉がある。本来持って生まれた性質はそれぞれ相似たものだが、身についた学習によって、大きな差が生み出される。先天的な素質よりも後天的な学習を重く見よというわけである。また衛霊公には、

「我嘗て終日食らわず終夜寝ねず、以って思う、益なし、学ぶに如かざる也」

とあって、人に教わる勉強ほど効果的な学習はないと断言される。一人でどれほどない知恵を絞って見たところで、素直に教えを受けた場合ほどには効果がない。実に穏やかに学ぶことの必要性を説いている。もっとも孔子は、決して学ぶことだけを強調しているわけではない。為政では、

「学びて思わざれば、則ち罔し。思いて学ばざれば、則ち殆うし」

とある通りである。しかし、これが述而篇になると、

「憤（ふん）せずんば啓せず、悱（ひ）せずんば発せず 一隅を挙げて、三隅を以って反らざれば、則ち復（また）せざるなり」

と言われ、先の穏やかな姿勢は一変する。学ぶ意欲の強さが強固に主張される。学ぶことの大切さが説かれた後に、学ぶ意欲の痛切さが厳しく求められる。分かろうとする熱意が高揚してもう一步のところまで来ていなければ、またもう少しで言葉になりそうなところまで思いが煮詰まっていなければ、教える気はない。また一例を挙げて説明すると、三例を持って応えるようであれば、二度と教えないと、にべもない。教える者のすさまじいまでの姿勢が貫き通される。学ぶ者も教える者も、まさに真剣勝負と言わんばかりである。この緊張感は、衛霊公では、

「仁に当たりては、師にも譲らず」

と、弟子が強固な姿勢で臨むことを強いている。師であっても、うかうかと暢気にしているつもりはないというのであろう。しかし、陽貨では、一転してこうも言われる。

「唯上知と下愚は移らず」

とにべも無い。上知と下愚は教育から除外される。中間に位置する凡庸な人間にしか教育の要はないということだろうか。優れた者は放置しても自ら学習を進めることができる。教える必要はない。

自暴自棄（『孟子』「離婁上篇」）な愚か者は何を言っても通じず無益である。だからこれも教える必要はない。教える必要のあるのは、礼を失せず、仁義を弁えたその中間にいる者ということになる。しかしもちろん、一番多いのはこの中間にいる者であって、結局は大半の人物を教育対象にしていることではあるだろう。

孔子は、能力は凡庸だが、意欲のある者、そのような者を求めた。教育することの効果や意義が、そのような人材にこそ典型的に現れると考えたためであろう。しかしどうも空海が理想とした、能力に応じてうまずたゆまず教えるという風ではなかった。学ぼうとする意欲がなければ、孔子の教育はそもそも成り立たない。やる気のない者は捨て置かれる。もっとも孔子自身は、「学びて厭わず、教えて倦まず」（述而第七二）という姿勢は貫いた。

『朱子語類』に至っては、更に冷たくあしらう朱子の姿が見られる。『朱子語類』は、講義ノートとして残されたものだが、これには、孔子の突き放す教育観に関する具体的な肉付けが饒舌に施されている。以下では、三浦國雄の『朱子語類』抄の章立てにそって、まずは、第1章「門生たちへ」から、学ぶ者の姿勢について述べた一文をみることにしよう。

「何ごともすべて君自身が取り組み、君自身が身をもって考え、君自身が修養せねばならん。本も君自身が読み、道理も君自身が研究せんといかん。私はただ道案内人であり、立会人にすぎん。疑問点があれば一緒に考えるだけだ。」（『朱子語類抄』講談社学術文庫33頁）

本人自身の取り組む姿勢や意欲がなければ、何ごとも成就しない。助けはするが、どこまでも自分で考え勉強しろと、飽くまでもそっけない。さらには、

「人をあてにする心がなくなれば、学問はきっと進歩するものです。」（同書36頁）

と言って、学問が孤独の精進のうちに成熟することを訴えている。また彼は、貧乏で学問に専念できないと愚痴るものに対しては、

「そんなことは関係ない。世の中に仕事のない暇人などいるものか。1日24時間、いつ暇であるかを見て、2時間暇ならその分だけ勉強し、15分暇ならその分だけ勉強すればよい。」{同書80頁}

と言い、寸暇を惜しむ大切さを教え諭す。また先生は天才的な方であって、私には足元には及びませんと言う弟子に対しては、

「私はいつも言うんだ。これはみんな自分を甘やかす言葉で、これこそ一番の欠陥だね。」{同書81頁}

それこそが自分を甘やかす態度なのだといかにも厳しい。そしていつも坐るとすぐに無駄話を始める一人の年配者には、

「君はもう40歳にもなっているのに本はろくに読めず、坐るとたちまち他人の噂をする。昨夜も諸君はよなかまでぺちゃくちゃやっていたが、どうしてこんなに集まりながら、わが身を見つめ、自分の勉強に励まないで、無駄話をしようとするのか。」{同書85頁}

とにべもなく咎めては、長くため息をついていたと言う。情景が脳裏に鮮やかに浮かび上がってくる。ため息までが聞こえてきそうな文章である。何度言っても分からない学生や弟子は多い。怒鳴るのはたやすいが、怒鳴って聞く相手でもない。かと言って、穏やかに話ができる状態でもない。まさにため息しか出ない。このような始末の悪い弟子は、眠る弟子たちに再三注意を促したマルコ福音書のイエスの嘆きを髣髴とさせる。

そして結局、学ぶことで聖人になることを夢見た朱子は、

「私は、十いくつのとき、孟子が＜聖人も我と類を同じくするものなり＞と言っているのを読んでいいようもなく嬉しかった。聖人になるのもたやすい、と思ったのだ。しかし今になって難しいという気がしている。」{同書89頁}

と、老年に達した現在の心境を誠実に吐露するに至る。聖人は学問から生まれる。そう信じきっていた朱子の悲嘆が強く伝わる。学問は、いつの時代にも、孤独に身を責めてなす独行道に等しい苦行である。その独行道に徹した朱子が自戒を込めて語った次の言葉にも、老兵の失望と詠嘆とが感じ取られる。そして同時に、これから学ぼうとする者への熱い思いをも感じさせて、痛切である。

「本は倦まずたゆまず読むべきで、のんびりやっていたんでは駄目だ。急ぎ読んでこそさきに読んだものとつながって来る。もしのんびんだらりとやっておれば、先の意味とつながらなくなる。私など本を読むのに61歳まで読んできて、やっとあらまし道理がこのように見えてきたが、こういうざまを真似てくれるな。今はもう年をとってしまった。いまさら分かったとしても何になるというのか。私の真似をしたら駄目になるぞ。君は若いうちに前へ進め。」{同書44頁}

しかしこれは言うまでもなく、彼がこれまで取ってきた方法とは真っ向から対立する方法であった。彼は、論語の読み方を問われて、

「この本は、急いだら駄目だ。必ずゆっくりと理解し、一章ごとに検討してゆき、その一章がすっかり分かってから次の章に取り組むようにしなさい。そういうふうにならなくやっていると見通しが開け、一事一事がわかるようになる。ちょうど飯を食べるのと同じだ。一口食べてからまた一口食べ、おいしい味を噛みしめてこそ、血となり精がつくのだ。」{同書205頁}

と述べるのが常であった。61歳で気づいたとする速読法は、徹底した自己否定、しかも相当高齢になってからの自己否定ということになる(筆者注:もっとも逆で、全く満足しているという文言もあるらしいが)。さぞかし学者としては覚悟の必要な自己否定であったろう。儒教的な人格形成の教育論を自ら破綻させた瞬間である。やはり融通無碍でない教育では、自己を許す配慮を欠き、

「君はもう40歳にもなっているのに本はろくに読めず、坐るとたちまち他人の噂をする。昨夜も諸君はよなかまでぺちゃくちゃやっていたが、どうしてこんなに集まりながら、わが身を見つめ、自分の勉強に励まないで、無駄話をしようとするのか。」{同書85頁}

とにべもなく咎めては、長くため息をついていたと言う。情景が脳裏に鮮やかに浮かび上がってくる。ため息までが聞こえてきそうな文章である。何度言っても分からない学生や弟子は多い。怒鳴るのはたやすいが、怒鳴って聞く相手でもない。かと言って、穏やかに話ができる状態でもない。まさにため息しか出ない。このような始末の悪い弟子は、眠る弟子たちに再三注意を促したマルコ福音書のイエスの嘆きを髣髴とさせる。

そして結局、学ぶことで聖人になることを夢見た朱子は、

「私は、十いくつのとき、孟子が＜聖人も我と類を同じくするものなり＞と言っているのを読んでいいようもなく嬉しかった。聖人になるのもたやすい、と思ったのだ。しかし今になって難しいという気がしている。」{同書89頁}

と、老年に達した現在の心境を誠実に吐露するに至る。聖人は学問から生まれる。そう信じきっていた朱子の悲嘆が強く伝わる。学問は、いつの時代にも、孤独に身を責めてなす独行道に等しい苦行である。その独行道に徹した朱子が自戒を込めて語った次の言葉にも、老兵の失望と詠嘆とが感じ取られる。そして同時に、これから学ぼうとする者への熱い思いをも感じさせて、痛切である。

「本は倦まずたゆまず読むべきで、のんびりやっていたんでは駄目だ。急ぎ読んでこそさきに読んだものとつながって来る。もしのんびんだらりとやっておれば、先の意味とつながらなくなる。私など本を読むのに61歳まで読んできて、やっとあらまし道理がこのように見えてきたが、こういうざまを真似てくれるな。今はもう年をとってしまった。いまさら分かったとしても何になるというのか。私の真似をしたら駄目になるぞ。君は若いうちに前へ進め。」{同書44頁}

しかしこれは言うまでもなく、彼がこれまで取ってきた方法とは真っ向から対立する方法であった。彼は、論語の読み方を問われて、

「この本は、急いだら駄目だ。必ずゆっくりと理解し、一章ごとに検討してゆき、その一章がすっかり分かってから次の章に取り組むようにしなさい。そういうふうにならなくやっていると見通しが開け、一事一事がわかるようになる。ちょうど飯を食べるのと同じだ。一口食べてからまた一口食べ、おいしい味を噛みしめてこそ、血となり精がつくのだ。」{同書205頁}

と述べるのが常であった。61歳で気づいたとする速読法は、徹底した自己否定、しかも相当高齢になってからの自己否定ということになる(筆者注:もっとも逆で、全く満足しているという文言もあるらしいが)。さぞかし学者としては覚悟の必要な自己否定であったろう。儒教的な人格形成の教育論を自ら破綻させた瞬間である。やはり融通無碍でない教育では、自己を許す配慮を欠き、最終的には自

己をも破綻させずにはおかないのかもしれない。あるいはこれでようやく、融通無碍への道の途に
ついたとも考えられる。

彼は70歳で死去する三日前まで自著に朱を入れていたと言われる。まさに彼の生涯は、最後まで自己否定の連続であったと言えなくもない。にもかかわらず、いやだからこそ、彼は、若い君は前へ進めと励ますのを忘れない。私は、この自己否定こそが彼の真実であったと考える。

悲壮感を漂わせる自己否定から、恬淡とした自己否定に至るのが、老子である。『老子』には、

「学ぶことをすてよ。そうすれば思い煩いことはなかりう。はいというのとああというのとに、
どれほどのちがいがあろう。善と悪の違いだって、どれくらいのものであろうか。」〔同書43
頁第20章〕

あるいは、

「天下すべての人がみな、美を美として認めること、そこから悪の観念が出てくる。善を善として認めること、そこから不善の観念が出てくる。」（『老子』小川環樹訳 中央公論社8頁）

とある。融通無碍であることは、このような断定の排除から生まれる。これが更に極まると、

「学問をするときには、日ごとに学んだことが増してゆく。道を行うときには、日ごとにすることを減らしてゆく。減らしたうえにまた減らして行って、最後には何もしないことに行き着く。この何もしないことによってこそ、すべてのことがなされるのだ。」（同書94頁）

と、禅問答の様相を呈している。しかしこの徹底した否定は、老子にあっては、あらゆるものを受け入れようとする豊かな包容力へと収斂する。指導者としてこれほど頼りになり、かつならない指導者はないだろう。よろしきにしがたって導くことなどたわいもないことだろう。

ところで仏陀の考えはどうだろうか。比較的仏陀自身の生の声に近いことばが残されていると言われる『ブッダのことば』には、

「生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人となり、行為によってバラモンともなる。」（『ブッダのことば』中村元岩波文庫35頁）

と実践を強く求める言葉が残されているが、同時に仏陀は、知ることの大切さを説くことも忘れない。『真理のことば・感興のことば』には、

「学ぶことの少ないものは、牛のように老いる。彼の肉は増えるが、彼の智慧は増えない。」（『真理のことば・感興のことば』中村元訳 岩波文庫31頁）

と、鋭い口調で述べられている。

「愚か者は生涯賢者に使えても、真理を知ることがない。匙が汁の味をすることができないように。」（同書 19 頁）

と、これまた辛辣である。仏陀自身は、学ぶことの意味を決して否定することはなかった。空海も、最終的には、先の『三教指帰』において、しかし、教育の現場では、仏教に偏らずに、儒仏道の三者を総合的に学ばせることを校則としたことは、すでに述べたとおりである。

Ⅲ：ロック・ルソー・孟子・呂不韋・本居宣長・道元・荀況・佐藤一斎・子思

西洋でも、ソクラテス、プラトン、ロック、ルソー、カント、更にはラッセルに至るまで、教育について言及した哲学者は数多い。この中で、近世でもっとも大きな影響を与えたのは、ロックとルソーであろう。ロックは、精神は白紙だとして経験の重要性を説き起こしたが、その教育論は、健全な身体にこそ健全な精神が宿とする理念に貫かれている。従って、教育論では、まず器である身体について述べたあと、中身の精神論に移るという体裁が取られている。結局は、理性が欲望を抑えて、健全さを具備するように精神と身体を習慣化させるところにまで持っていくことを理想とした。

「体力は主として困難に耐えることにあるごとく、また精神力についても同様です。そしてあらゆる徳と価値の偉大な原理と基礎が置かれていますのは、人間は自己の欲望を拒み、自己の傾向性をおさえ、欲望が別の方向に傾いても、理性が最善として示す処に純粹に従うことができるという点です。」{『教育に関する考察』岩波文庫 46－7 頁}

自己の欲望を拒み、自堕落になる傾向性を押さえ込んで、理性の声に従う。

「子供が最初に学んで知らねばならないことは、どんな物でも、気に入るから与えられるべきではなく、適しているから与えられるということではなければならない。」（同書 55 頁）

子供の教育に必要なことは、この自己制御を習慣化させることに尽きている。泣きわめいたからもらえるというのではなく、持つにふさわしいものだから持てるという指導こそ肝要である。子供を育てる親の重大な過失は、

「精神がもっとも柔軟で、もっともたわめ易いときに規則に柔順で、理性に良く従うようにしておかなかったことでした。」{同書 47 頁}

と辛辣である。

「甘やかされた子供は、叩くことや、悪口を言うことをきっと教わり、ほしくてわめいているものは必ず手に入り、すき放題をしているものです。こうして両親は、子供が小さいときにその機嫌をとり、甘やかして子供のうちにある性能を台無しにするのですが、両親は自分たち自身がその源泉に毒を入れておいたのに、後になって苦味のある水を味わうことになって不思議がるのです。というのは、その子供が大きくなり、これらの悪習を身につけていると、また子供が大きくなって甘やかすことができなくなり、玩具のように扱えなくなると、その両親は、餓鬼どもは厄介で手に負えないと嘆き、また子供が強情なのを見て機嫌を損ね、そのような子供が手に負えぬので困っているのですが、これらのことは、両親自身が子供の心に吹き込み、後生大事に育てたものです。」{同書47－8頁}

すべきときに適切に指導しなかったことを後になって悔やむというのは、よくあることだが、旧約聖書の外典「シラ書」にも、そのことが余すところなく述べられている。

「わが子を愛する者は、しばしば鞭で懲らしめる。子供を甘やかす者は、傷の手当に明け暮れ、子がわめき叫ぶのを聞く度に、心を煩わす。馬は馴らさなければ手に負えなくなり、子はしつけなければ、わがままになる。子供は放任すればお前を驚きあわてさせ、溺愛すれば、お前を嘆かせることになる。子供と一緒にあって笑い興じるな。さもないと、共に悲嘆に暮れることになり、最後には、歯ぎしりをして後悔することになる。若いときには気ままなことをさせるな。また過ちを大目に見るな。若いときには腰を低くさせよ。子供のうちに体罰を与えよ。さもないと強情になり、言うことを聞かなくなる。さもないとその子は非行に走り、お前を困らせる。」(シラ書30：1－13)

子供と一緒にあって笑い興じている親の姿ほど微笑ましいものはない。いかにも幸せを絵に描いたような場面である。しかし自分たちが手に負えない子供に育てておいて、善良な大人になるはずだと期待するのは、余りにも愚かである。厳しさを欠いた甘やかすだけの教育では、共に悲嘆にくれることになり、最後には、歯ぎしりして笑いに打ち興じたことを後悔するだろうと予言する。最近、とみに凄惨な事件が多くなった。教育が間違っていたと号泣する親もいるようだが、まさにその意味では、これは、不気味な予言に満ちた文章である。

ロックも、教育が人間に差を生むことはもちろん承知しているが、孔子や朱子ほど、学ぶ者に対しては表面上それほど冷淡ではない。確かに、彼は、学ぶことの意義を丁寧に教え諭しているし、教える側の工夫と裁量をも強く求めた。学習者の注意を喚起しながら、愉快地教え、穏やかに諭し、能力以上のことは教えないともしている。曰く、

「教師の大切な腕前は、その生徒の注意を引き、それを引き付けておくことであって、そうできる限りは、必ずその学習者の能力の及ぶだけ、速やかに進歩させることができます。そしてそれなくしては、幾らせき立て、大騒ぎをしてもほとんど効果がないか、無益です。その目的を達するためには、子供にできるだけ彼が教える事柄が有益であることを理解させるべきです。そして学んだことによって、以前にはできなかったことができ、また学んだ事柄は、それを知ら

ない他の人よりもある力ができ、真に優れるようになるものであることを悟らせなさい。その上さらに、教えることにはすべて愉快さを加えなさい。またその態度全体を一種のやさしいものにして、彼が子供を愛していること、および教師は子供のためになることしか考えていないことを感得させなさい。これが子供の心に親愛の情を生じさせる唯一の方法で、それにより、子供はその学業に耳を傾け、教えられることを楽しく思うようになるでしょう。強情な場合にのみ厳格にし、あるいは手荒に取り扱うべきです。一切の他の過ちは穏やかなやり方で矯正すべきで、思いやりのある励ましの言葉は自発的な心に更に良い、さらに効果的な作用を及ぼす」。
〔同書 261 頁〕

学ぶことが優れた力になることを知らしめると同時、学ぶことの楽しさをも教えろと言う。何より思いやりのある励ましの言葉が自発的な心に更に良い効果的な作用を及ぼす。孔子とは異なり、学ぶ者にも暖かな視線が注がれているように見える。しかし彼は、懶惰な息子には、それがもって生まれた性癖がどうかを見定めるために、遊ばせている間も監視を続け、その様子を見ることを進めている。そのうち遊びに飽きて、本を読みたくなれば読むだろうと言うが、そうならない場合には、肉体労働をさせて様子を見ろとも述べている。また息子に課した仕事が、予定通りに終わっていない場合には、息子が一人であることを確認した上でと言いつつ、

「そのことを取り上げて、物笑いの種にしなさい。しかし叱ってはいけないので、ただ息子に向かって冷ややかな顔つきをして、彼が改めるまでそれを続けなさい。」（同書 197 頁）

と狡知にたけた態度に出ている。ここまですると、悪意まで感じられて、空海の理想とした慈悲心とはほど遠くなる。

ロックの教育は、厳しい管理教育である。外面の頭の形は産婆がなでて形良くし、内面の精神は哲学者が良くしななければならないという。このような善良を装った徹底した管理教育に対しては、ルソーの自然放任の教育がしばしば対比される。貧乏人は、実物教育のお蔭で自分の力で人間になれるが、金持ちの子供はそうではない。ルソーは、金持ちではあるが孤児のエミールを主人公に、人間になる過程を描き出してみせた。厳然とした事物の世界に放任して、その制約のなかで、自由に生かせること。教訓をたれことではなく、本性を実際場で訓練させること、それが本当の教育だという。自然によって与えられたすべての力を充分にもちいさせ、必要なことだけにかぎって与えること、他に依存することなく自分の力で生きること。いかにも素晴らしい教育論にも聞こえるが、一方では同時に、そのような力のない者には、当初から冷徹なほど醒めた排除の姿勢を崩さない。曰く、

「その子がたとえ八十才まで生きるにしても、私は病弱な子は引き受けなかつた。いつまでも自分にとっても他人にとっても何の役にも立たず、自分のからだを守ることばかりを考えていて、体が魂の教育をさまたげる、そういう生徒はごめんだ。そういう生徒に無駄な心遣いをそそいだところでどうにもならない。社会の損失を二倍にし、一人ですむところを二人の人間を奪い去るだけのことはないか。（中略）ひたすら死を免れようと考えている人間に生きるこ

とを教えることは私にはできない。」(『エミール』岩波文庫 55頁)

このように意欲や素質のない者には容赦はないが、持っている力を最大限に生かしきることを意図した性善説に基づく教育論は、特段ルソーに特異なものではない。ルソーは、良心はもともと人間に備わったものだとしたが、人間には、良知良能が備わっているとしたのは、孟子であった。人間が誰しも井戸に落ちかかった幼児を無心に助けようとする。咄嗟にそういう行動に駆られる。それが惻隱の心であって、そのような心は、教育以前に本来すべての人間に備わっている心情である。孟子はこの惻隱の心以外に、羞惡の心、辭讓の心、是非の心を、人間に備わる四つの本性、四端としているのは周知の通りである。曰く、

「およそ人間には、特に学ばなくとも自然によくできると言う能力(すなわち良能)があり、あれこれと考えなくとも自然に分かるという知恵{良知}がある。(いずれも生まれながらに備わっているものである)さればこそ、2,3歳の幼児でさえも、自分の親を親しみ愛することを知らないものはなく、やや大きくなると、自分の兄を尊敬することを知らないものはない。ところで、この親を親しみ愛するのは仁の心であり、目上を尊び敬うのは義の行いである。ゆえに、善すなわち仁義を行いたいと思ったら、外でもない。ただこの親を親しみ目上を敬う心を広く天下の人々に推し及ぼすだけのことである。」{『孟子』岩波文庫 335頁}

と述べ、いわゆる『大学』で述べられた修身齐家治国平天下へと論を進めている。その信念には一切の迷いが無い。同様に持って生まれた本性を学び鍛えて訓練する必要を説いたものに、『呂氏春秋』がある。

「いったい天は人間を生んだとき、耳には者を聞き分ける能力を与えた。しかし学び鍛えなければその聞く力は聾者にも及ばない。目には物を見分ける能力をあたえた。しかし学び鍛えなければその眼力は盲者にもおよばない。口には話す能力を与えた。しかし学び鍛えなければ、その話す力は啞者にも及ばない。心には、ものごとを判断する能力を与えた。しかし学び鍛えなければ、その判断力は狂者にも及ばない。だから学問とは、何かを足し増やすということではなく、人間の持ち前の天性を遂げさせることである。」(同書 129頁)

決して人間は白紙ではない。すべてが教えるものの自由になるわけでもない。理性があっても、教え導き訓練しなければ、適切に機能しない。すでに持っている天性をいかに発揮させるか。それを考えるのが教育である。もちろんこの天性を引き出すには優秀な教師が必要になる。だからこそ、呂氏春秋では、教師や学生には厳しい眼が向けられる。優れた教師とは、

「優れた教師は、安心を与え、楽しみを与え、休みも与えて、遊びもまじえ、厳粛かつ厳しく勉強させる」。{『呂氏春秋』講談社学術文庫 138頁}

もののだとして、この安、楽、休、遊、肅、嚴の6つを巧みに操る巧みさを求めている。逆に、劣っ

た教師については、

「劣った教師は、気持ちがむらで落ち着かず、取捨も一定せず、安定した心がなくて、ちょうど天候の晴雨、人の喜怒のように変化する。いうことも日ごとに変わり、自分勝手に行動し、間違いが自分にあってもその非を認めず、間違っているとしても押し通して、人の忠告で改めようとしない。相手が権力を持ち枢要な地位にいたり、金持ちの子弟であったりすると、才能も考えず、行状も調べず出かけて行って教え、おもねりへつらい、そのうえなおも至らぬところがあったのではないかと心配する」。(同書 140 頁)

と、辛辣を極めた文章を綴っている。そして更には駄目な弟子についても、舌鋒は鋭い。曰く、

「駄目な弟子は、先生に対しては誠実でなく、学問に心がけることも専一でなく、学問愛好の度合いも浅く、勉強の仕方にも不熱心で、弁論すれば是非を明確にできず、人から教えられても正確にできない。そのくせ先生が悪いと恨み心を抱き、時の風俗にどっぷりつかって、心は世事にかまけている。権力を誇り、是非をあげつらい、巧詐（こうさ）にたけ、小利に目がくらみ、欲望に感溺する。事をたずねるとその答えは首尾一貫せず、文章を作れば内容が乱雑で統一せず、簡単なことでもつじつまが合わない」。(同書 144 頁)

意欲はないし、まともに話も通じない。遊びにうつつを抜かして、先生が悪いと非難だけはする。いつの時代にでもいる学生の姿だろうが、いかにも臨場感に溢れていて興味深い。

しかし先生を愚痴る前に、そもそも学ぶということに必要な不可欠なこととは何か。結局何が最も大切なことかを問う必要がある。それを問うとき、本居宣長の『うひ山ふみ』が参考になる。これは、本居宣長 69 歳の作であって、『古事記伝』を書き終えたのちに、学問の心得を、門人たちの求めに応じて丁寧に書き連ねた書物である。曰く、

「詮ずるところ学問はただ年月長く倦ずおこたらずしてはげみつとむるぞ肝要にて学びやうはいかやうにてもよかるべくさのみかかはるまじきこと也。いかほど学びかたよくても怠りてつとめざれば功はなし。又人々の才と不才とによりて其功いたく異なれども才不才は生れつきたることなれば力に及びがたし。されど大抵は不才なる人といへどもおこたらずつとめだにすればそれだけの功は有ル物也。又晩学の人もつとめはげめば思ひの外功をなすことあり。又暇のなき人も、思ひの外いとま多き人よりも、功をなすもの也。されば才のともしきや、学ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止ることなかれ。とてもかくてもつとめだにすれば出来るものと心得べし。すべて思ひくづをるは、学問に大にきらふ事ぞかし（学問は、長い年月飽きたり怠けたりせず励んで努力することが肝心。学び方がどうというより、そもそも怠けては成果はおぼつかない。また才能如何で学問の成果も異なるが才能の有無は生まれつきだからどうしようもない。しかし、才能のない人と言えども大抵は努力次第でそれだけの成果はあがる。晩学の人も努力で意外に成功する。勉強する暇がないという人も、案外、暇をもてあます人より成果をあげられることがある。つまり才能の有無や出だしの早晚、時間がないとかそういうことを理由に途中で学問を投げ出しはいけない。努力すれば出来ると思いがけるべきで、諦めと挫折が学問

をするに際して一番いけない。)。』（『うひ山ふみ』岩波文庫 15 頁）

実に淡々と、学ぶことの要諦が語られている。王道を極めた学者のまさに至言である。教え方がどれほど優れていても、どれほど要領よく教えてみても、本人自身が怠けているようでは何の役にも立たない。至極分かりきったことだが、現代では、教える側の飽きさせない工夫ばかりが優先されて、学ぶ側の怠らない姿勢が影をひそめている。このような現状であればあるほど、まさに有効な至言なのかもしれない。

学ぶ者の意識改革を怠っておいて、方法論だけをどれほど巧みにしたところで、頭のなかはいつまでの空っぽのままである。穴の開いた頭には、すべてが素通りするだけの話だ。教える側も時には、自信をもって、怠けずにコツコツとやるしかないことを身をもって示し、潔く言う必要がある。勉強とは、自らに勉め強いることだからである。

もちろん彼も、先の文章の前に、方法論に触れて次のように述べてはいる。

「学びようの次第も一わたりの理によりて、云々（しかじか）してよろしと、さして教へんは、やすきことなれども、そのさして教へたるごとくにして、果たしてよきものならんや、また思ひの外にさてはあしき物ならんや。実にはしりがたきことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、実はただ其人のころまかせにしてよき也。」（同書 15 頁）

こうすればより効果が出るかも知れないと、色々老婆心を働かせても、それが本人のためになるのかどうかと問い詰められると、怪しい限りだと言わざるを得ない。結局、学ぶ者のころまかせに落ち着くとする以上、方法論よりも学ぶ者の意欲が重要視されるのは当然のことかもしれない。そして的を絞ったなら、その分野については志を高く持ち、極め尽くすという意気込みがなくてはならないと言い放つ。

「志を高く大きに立てて云々、すべて学問は、はじめよりその心ざしを、高く大きに立て、その奥を究めつくさずはやまじとかたく思ひまうくべし。此志よわくては、学問すすみがたく、うみおこたみ倦怠るもの也」。

学問に志す者が忘れてはならない二つの要素を、これほどたくましく述べた言葉を知らない。平凡でありながら、学問する人の精神を奮い立たせずにはおかない達意の名文である。

この本居宣長の文章は、同じく禅を極めた道元の弟子懷奘が認めた『正法限蔵随聞記』の次の文章を想起させる。

「悟りのためには、全く博識も学才も必要でない。ゆえに素質生まれつき最下等のものだから駄目だということはない。真実の学道はさやしいはずのものだ。{中略}しかし、そうは言ってもまことに仏道を悟り仏法を得るものは、わずか一人か二人である。したがって、秘訣、心得もあるのは当然のことである。今これを考えてみるに、悟りを得ようとする志が、しっかりと定まっているか、いなきか、によるのである。」（『正法限蔵随聞記』講談社学術文庫 山崎正一訳 157 頁）

また、

「み仏たちも、祖師たちも、みな、もとは凡夫であつたのだ。凡夫のときは、必ず悪い行いもあり、悪い心もあつた。にぶくもあり、愚かでもあつた。さりながら、みなそれを改めて、立派な師匠に従い、仏法の教えにより修行したから、みな、仏となり、祖師となつたのだ。今の人も、そうなくてはならない。自分が愚かであるからとか、自分にはぶいからとかいって、卑下してはならぬ。この世に生きてあるうちに志を立てなかつたら、いずれのときに志をたてるというのか。求めれば必ず得られるのだ。(同書 53 頁)

と述べ、道元も、やはり切々と才能はともかく、その志の強さを何より大切なことだと述べている。このように述べた上で、なお道元は、悟りの道を求める切実さを以下のように表現した。

「例えば、人が大切にしている宝物を盗もうとしたり、強敵を討とうと思ったり、あるいは、高貴な美女を手に入れようと思うような人は、寝ても醒めても、事にふれ折にふれて、さまざまに事情は変わっても、それに応じて、つねに時機をうかがい、心にかけているものだ。この念願が極度に切実である場合には、それが、とげられないということはないのだ。」〔同書 157 頁〕

高貴な美女を手に入れようとする切実さで、修行に励むこと。煎じ詰めると結局は、学ぶ者の意欲と関心の度合いに落ち付く。その煎じ詰めた事実を、痛切に感じなければ、何ごともものにはならない。しかしできれば、蒙を開く契機となる師に出会えるほど幸せなことではない。だからこそ、本物にで当てた弟子たちは、必ずよき師について触れることを忘れない。道元も『学道用心集』第五に「参禅学道、可求正師事」を置き、次のように述べている。

「仏道修行は、指導する師匠が正しいか否かにかかわる。弟子はよい木材のようなもので、師はこれを取り扱う大工のようなものである。たといよい材木でも、良い大工が得られなかつたら、建築材料としての美しさはあらわれない。たとい曲がった材木でも、もし腕利きの人にめぐり会えば、思いもかけないすばらしい出来上がりになりかねない。師匠の正しいか否かによって、弟子の悟りに偽者と本物ができる。」〔『学道用心集』大東出版社 篠原壽雄 95 頁〕

正しい師に出会えることの大切さは、何も仏道修行に限ったことではない。技術を修得する場合などは、師の善し悪しがすべてを決すると言っても過言ではない。素晴らしい技術を目の当たりにして、自分の稚拙さを痛切に感じる。技術や知恵の未熟さを、徹底して感じ取らせてくれるのが、正師である。知恵においても技量においても、このような正師が現代では、驚くほどに少なくなっていることに愕然とする。特異な例外もあるだろうが、所詮、二級品は二級品しか生み出せない。現代の青年たちを育成したのは、まさに大した能力も持てなかつた我々である。まずは、その罪を大いに恥ずべきかも知れない。

『荀子』には、学者の心得として、

「君子の学問は、耳から入ったことが心につき体中に行き渡って行動にもあらわれる。だから一寸した言葉一寸した身動きもみな法則とすることができる。小人の学問は、耳から入ったことが口から出て行く。口と耳の間はわずか四寸、どうして七尺の体全体を立派にするだけのことができるか。昔の学者は、自分自身を立派にするために学ぶ、今日の学者は、他人に見せびらかせて榮達を得るために学ぶ。君子の学は、それで我が身を立派にし、小人の学は、それを人に取り入るための贈り物とするだけである」。{『荀子』岩波文庫上 17 頁}

とある。古の学徒は、己のために、今の学徒は人のために学ぶという孔子の言葉を髣髴とさせるが、更に思い切った表現で、体中に学問が行き渡っていなければならないとした。それが君子の学問だと言う。取り入るための学問ばかりが横行して、本物が影をひそめている。佐藤一斎の『言志四録』には、

「権は良く物を軽重すれども、而も自ら其の軽重を定むること能わず。度は能く長短すれども、而も自ら其の長短を度ること能わず。心は則ち能く物を是非して、而も又自ら其の是非を知る。是れ至靈たる所以なる歟。」(『言志四録』川上正光訳注 講談社学術文庫 37 頁)

とある。秤は品物の重さは量れるが、自分の重さは量れない。物差しは物の長さは計れるが、自分の長さは計れない。心だけは例外で、他のものの是非だけでなく、自分の是非をも計ることができる。心したい一言である。最後に、学ぶことの意味とありようを言い尽くした言葉として、『中庸』の一節を挙げておく。

「何ごとでも広く学んで知識を広め、詳しく綿密に質問し、慎重にわが身について考え、明確に分析して判断し、丁寧に行き届いた実行をする。(それがまことを実現しようと努める人のすることだ。) また学んでいないことがあれば、それを学んで充分になるまで決して止めない。まだ質問していないことがあれば、それを問い質してよく理解するまで決して止めない。まだよく考えていないことがあれば、それを思索して納得するまで決して止めない。まだ分析していないことがあれば、それを分析して明確になるまで決して止めない。まだ実行していないことがあれば、それを実行して充分に行き届くまで決して止めない。他人が十の力でできるとしたら、自分は千の力をだす。もし本当にそうしたやり方ができるとしたら、たとい愚かな者でも必ず懸命に也、たとい軟弱な者でも必ずしっかりした強者になるであろう。」(『中庸』金谷治訳注 岩波文庫 205 頁)

学ぶ者の心得は、これに尽きている。教師は、学ぶ者であると同時に教える者でもある。この二面性を強く意識して、絶えず志を新たにしなければならない。そして教え導く者としては、この心得に応えるべく、慈悲の心を持ち、忠孝に思いをいたして、学童の貴賤を問わず、貧富をみず、よろしきに従って導き、うまずたゆまず人々をおしえなければならない。仏陀のよろしきに従う対機説法と慈悲の心を内に蔵し、学びて厭わず、教えて倦まない孔子のごとく、何ごとにも拘泥せず老子然として、学ぶ者に相對することが空海の理想であった。

教育は、「詩に興り、礼に立ち、楽になる」（『論語』講談社学術文庫泰伯8 加地伸行訳179頁）と言われる。詩に興ると言われるほど詩経を大切にしている理由は、『論語』陽貨篇を読めば納得させられる。

「老先生が述べられた。お前たちよ。どうしてかの詩を学ばないでよいものか。詩を朗読するすると、その理解を通じて感情を高め、世態を観、人々と共生し、政治を批判することができる。また近くに引きつけては、父に事える道が、遠くに置いては、主君に事える道が分かるし、動植物などの万物の名称も数多く知ることとなる」と。

詩経を勉強することで、世の中に対する興味が目覚め、世間を見る目が養われる。集団生活のルールも学べるという。まずは感受性を高めるために詩を読むこと、そうして礼に立つとは、「礼を知らなければ以って立つ無きなり」と言われているように、社会規範を身につけていないものは人の世を生きるはいけないという意味である。法を心得て世間の規範・区別の実を身に付けることが肝要となる。最後に調和を象徴する音楽を修得する。これが孔子の理想であった。

礼は差別（差異）の意識から生じる。楽は本来、心情から発せられるもので、心情の統一を目標とする。「音楽は、人々の心を和合させ、礼儀は人々の差別を明らかにする」と、「楽記第十九」には書かれている。また「和合すれば、互いに親しみ、差別をわきまえれば尊敬することを知る。しかし音楽の感化が強すぎると、和合が流れて無秩序になり、礼儀の効果が強すぎると、人々の心が離反する」とも言われ、巧みな礼楽のバランスが必要だとも指摘される。

差別とは、偏見の温床ではなく、思慮分別の基である。ただ偏狭な価値観に基いた差別だけが偏見を生むのであって、ただ人間には、差があり別があること、それがこの場合の差別（差異）の真意である。この差別と和合の二面性を教えることが、馴れ合いと表面的な和合に真実を覆い隠している現代の教育には、何より肝要なことかもしれない。そしてこの調和の取れた人間の目指すべき道は、「子罕」に見られる。それが四絶である。「子、四つを絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし」。ここでは簡単に、「偏見がなく、こだわりがなく、頑なでなく、利己的でない」と解して、これを人間教育の理想としたい。

